Extended (or Cambodian) Mahāvaṁsa 訳註（七）

福田孝雄

その[596]昔、バーラーナシー（Bārāṇasī）と称する富み栄えた美しき都で、ブラフマダッタ（Brahmadatta）（王）が国を治めていた時、菩薩[597]はある再生族の家に生まれ、成年に達してタッカシラー（Takkasilā）[598]へ行って、あらゆる学芸を学んで有名になったが、そこを去って雪山地方（Himavantappadesa）[599]に入り、出家して仙人道に入り、五神通と八定に達し禅定の楽を享受しつつ麗しき森林の中に独り住んでいた。その後塩[600]と酸味のものとを得るために或る辺鄙な村里に行きつつあったが、人々は彼を見て信仰心を発し、[601]ある森の中に（木の）葉（茸き）の小屋を建て、資具等を供して住まわせた。その[602]時その村に一人の捕鳥者がいたが、彼は一羽の囮の鷓鴣を捕えて芸をしこみ篭に入れて常に愛情をもって世話をしていた。彼はその鳥を森に連れて行き、その（囮の）声に（つられて）やって来る鷓鴣たちを捕[603]えて連れて来て売るのであった。[604]鷓鴣は『私のために沢山の親族の鷓鴣たちが死ぬ。それは私の罪ではないだろうか』と言って、彼は声を出さなかった。彼（の捕鳥者）は、鷓鴣が声を出さなくなったのを知って、竹の鞭で鷓鴣の頭を打った。しばしば打つので、それで[606]鷓鴣は苦しみに耐え切れず、ついに声を出すのである。このようにして捕鳥者は貪欲から多くの鷓鴣たちを捕えて、長い期間にわたって自らの生活を営んでいた。悩み苦しんだ彼の[608]鷓鴣はこのように思った。『私には「あゝこの者たちは死ぬべきだ」との思いはない。しかしそれによって生ずる業は常に私に還って来る。もし私が声を出さなかったなら、この者たちは来なかった』と。『（私が声を）出したがためにこの者たちがやって来た。こ（の捕鳥者）は、このやって来たわが親族を捕えて死に到らしめるのである。一体[611]この悪は私にあるのだろうか、それとも無いのだろうか』と。それ以来『誰か私の疑いを断ってくれるだろうか』と、彼はそのような賢者を捜して歩いた。一日彼（の捕鳥者）は、彼等多くの

鷓鴣を捕えて篭に満たし『飲み物を飲もう』と思った。それ[613]から菩薩の草菴に行って、その（鳥の入っている）篭を菩薩の傍に置いて、飲み物を飲みたいだけ飲んで、直ぐ[614]砂の平地に臥して眠りにおちた。そこで彼の鷓鴣は（その捕島者）が眠りに入った状態を知って、『私はこの疑を苦行者（tāpasa）に尋ねよう。もしこ[615]（の行者）が知っていたならば彼はこのことを話してくれるだろう』と思った。彼は[616]篭の中にいながら、偈を唱えて問いつつ言った。『まこと私は安楽に生きており、食べるべき物を得ております。[617]（しかし私は他を）危難に（陥し入れる）ところにおります。尊師よ、私の赴くべき所は何処にありますか』と。彼（の菩薩）は、彼の問に答えて第二の偈を唱えた。『鳥よ、（もし）汝の心が、悪しき行為により傾くことがないならば、彼の悪なき賢者の罪に汚れることはない。』と。彼の鷓鴣はその語を聞いて、第三の偈[618]を唱えた。『わが一族がいると（思って）、多くのものたちがやって来る。[619]（猟夫は）私のために罪業を得、私の心はこれを疑う』と。彼の菩薩は、それを聞いて、第四の偈を唱えた。『もし汝の心に悪意がなかったなら、（汝に）よりて罪業[620]を得ることはない。無関心なる賢者は罪に穢れることはない』と。このように菩薩は種々なる方法で鷓鴣を教えたので、菩薩のお蔭で彼（の鷓鴣）は、悔疑を持たぬようになった。彼の捕鳥者は目を覚まして菩薩に挨拶をし、そこの鳥篭[621]を携えて自分の家に向った。師はこの法話をなされて、本生[622]（の昔）と（今の）凡てを結びつけて『（その時の）彼の疑いを取り除きつつある鷓鴣はラーフラ（Rāhula）であり、菩薩[623]は私であった』と（話された）。この法話を聞いた王はそれによって満足した。（長老は）王の心地良き王園に七日間滞[624]在して、大（地）の守護者に仏の最高の教えを学ばせた。その時に大（地の）守護者は二夜叉を遣わして、地上の凡ての比丘達を集めさせた。第七日目に（王は）自分の楽しき精舎[625]に赴き、比丘衆を残りなく集めさせた。（そして王は）長老と一緒に天幕の中の一隅に坐して、邪執の比丘達を一々傍らに呼び出して、『大徳よ、善逝は何説者であられるか』と大[626]（地の）主は問うた。彼等は各々己れ（の見に）従って常住[627]者等と答えた。王は彼等一切の邪見者達を還俗させたが、（このようにして）還俗させられた者達は凡て六万人であった。（王は）正法の比丘達に問うて『善逝は何説者であるか』[628]と言った。（彼等は）『分別説者（vibhajjavādin）であります』[629]と言ったので、王はそれを彼の長者に問うた。（王は）『正覚者は分別説者であられますか』と。彼（の長老）は『そうであります』と（言った）。王は『そうである』と聞いて、その時王の心は満足して、『大徳よ、僧伽は浄められました。[630]それ故僧伽は布薩を行うべきであります』と、王は長老に言って、僧伽に守護を与えて、麗しき都に入った。僧伽は和合[631]

して、それ以来布薩を行った。

長老は多数阿僧祇の比丘僧伽から、六神通を得三蔵に通暁し、無碍解を弁別せる比丘[637]一千人を正法結集（saddhammasaṅgaha）を行う為に選任した。彼等はアソーカーラーマ（Asokārāma）において正法結集を行った。マハーカッサパ長老やヤサ長老が彼等（と共に）法結集を行ったように、ティッサ長老もまたそ（の結集）を（行った）。ティッサ長老はその結集の道場（saṅgītimaṇḍala）で、異説を砕破する「論事」（Kathāvatthu）（と言う）論書を説いた。このようにアソーカ王の外護の下に一千人の比丘達により、この法の結集は九ヶ月にして終了した。王の（灌頂）第十七年に、彼の聖仙の齢七十二歳（の時）、大自恣（Mahāpavāraṇa）（の日に）この結集を終った。諸天もまた人間達もこれに称讃を与え、合誦の終りに大地は震動した。そのようにウパーリ、ダーサカとソーナカ、シッガワ、モッガリプッタ・ティッサの、これ等五人の大勝せる人達の相承により、吉祥と称されるジャンブディーパにおいて、律を第三結集に至るまで断絶することなく伝承した。勝れた麗しき（大）梵天の宮を捨てて、彼（のティッサ）は教（法）のために厭うべき人間界に来り、なすべきことをなし了った人は、教法の務めを行った。他のいかなる者も（彼をもって）教えの務めにおいて懈怠であったと（なし得よう）か、と。

善人の信仰と感激と（を起す）ために作られた大史中の「第三結集」と名づけられる第五章。

第六章

1 かつてワンガ（Vaṅga）国のワンガの都城に、ワンガ族の王がおり、彼の王の妃はカーリンガ（Kāliṅga）王の（王）女であった。2 彼の王は彼の王妃によって一（王）女を得たが、占相者達は、この（王）女の獣王と同棲することを予言した。3（王女は）容色勝れて麗しかったが、甚だ好色であったので、王にも妃にも恥じ厭われていた。

4 彼女は独りで出ていって、気儘に楽を求めながら知らずにマガタ国に赴く隊商と共に行った。5 ラーラ（Lāḷa）国の森林において、一頭の獅子が隊商を襲った。他の者達は他所に逃れ去ったが、彼女は獅子のやって来た方へ（行った）。6 獅子は餌を獲って（その棲に）還ろうとして、遠くより彼女を見て、情欲をもって尾を振りつつ、耳を垂れて近づいた。7 彼女はそれを見て、かつての占相師の言葉を憶い起して怖れることもなく、彼の肢体をいとしさをもって愛撫した。8 彼女に触れたために獅子は激しい情欲を起こし、彼女を背に乗せて己が洞窟に導き、彼女と同棲した。9 彼（の獅子）と同棲することにより時を経て、彼の王女は男児と女児の双生児を産んだ。10 息子の手足は獅子の（ものに）似ているので、それよ

り、彼をシーハバーフ（Sīhabāhu）（獅子の腕）と呼び、娘をシーハシーヴァリー（Sīhasīvalī）と（呼んだ）。彼の息子が[11]十六歳の時、疑いを母に問うて『母よ、われわれの父は誰なのですか』と（言った）。彼女はそこで言うには、『息子よ、[12]（おまえの）父は、獣王であり、私はおまえの母なのです』。[13]彼の息子は疑いを懐いて、母にこのように言った。『もし父が獅子ならば、何故他処に（いるのですか）』と。彼女は凡てを彼に語ったが、彼は『どうして私達は（他処に）行かないのですか』と言った。彼女は『おまえ達の父は石でもって[14]洞窟を塞いでいるのだよ』と言った。大洞窟（を塞いでいる）その石を大力によって牽いて、彼は自分で肩に負って、[15]それから五十由旬を一日で行って置いてきて、自分の所に（戻った）。獅子が餌を求めて出かけた時、（彼は）母を右肩に、妹を左（肩）にして、そこより速やかに（逃げ）去った。彼等は木の枝を身に纏って辺境の村にやって来た。此処に、その時王女の叔父の息子でヴァンガ王の将軍が、たまたま（この）辺境の村に駐まっていたが、彼は作業の監督をしながら樹下に坐っていた。将軍は三人を見て『何処から来たのか』と問うた。彼の人達は問われて『私達は森林に住いするものです』と言った。彼の将軍は彼等に衣服を与えさせた。それらは彼等の優美な（衣服）であった。食物を木の葉に（盛って）与えさせたが、それらは彼等の功徳によって黄金の器となった。そのために、彼は驚いて『汝等は何者であるか。誰の親族であるか』と問うた。王女は彼に生まれと姓とを知らせた。彼の将軍は彼の伯父の娘を伴って、ヴァンガの都に赴き、彼女と同棲生活を営んだ。獅子が大急ぎで洞窟に還ったが、彼等三人（の姿）見えないので、児の憂いから食わずまた（食むべきものも）飲まなかった。彼はこの児等を捜しつつ辺境の村にやってきた。彼が村々に到ると、それらは一つ一つ破滅させられた。辺境の住民達は行って、王にこのことを告げて、『王よ、（獅子が）あなたの国土を荒します。彼を抑えて下さい』（と言った）。王は（その）語を聞いて、都の人びとと相談した。彼（の王）は彼等戦士を（獅子）と戦いをなす為に遣わした。戦士達は（都を）出発して辺境の村に行った。獅子は彼等戦士達を見て獅子吼した。そのため（戦士達は恐れて）辺境の地から逃げ出して都に入り、『（われわれは）彼を抑えることは出来ません』と言った。王は（獅子を）抑える者を得ることが出来ず歎き、象の背に一千金を載せて、大臣達をしてその時都に次のように布告させた。『何人でも、彼の獅子を殺害することが出来るものは、（一千）金を取るべし』と。このようにして（二日目には）二千（金）又（三日目には）三（千金）と人王は（賞金を積み上げたが）、財が持ち出されつつある時に、シーハバーフ童子は金を得るために母に知らせた。母は二回までは

彼のシーハブジャ（Sīhabhuja 獅子腕）を留めたが第三回目になった時に、彼のシーハバーフ童子は母に尋ねることなく、[34]己れの父を殺害する為に三千金を受取った。（人びとは）童子（シーハバーフ）を王に謁させたところ、王は彼にこう言った。『汝がもし獅子を捕えるならば、汝に即座に国を与えよう』と。[35]彼はその洞窟の入口に行き、そして父を呼んだ。[36]急ぎ出て来た（父は）、息子の来たのを見た。彼は弓を射ようとかまえ、（父を）殺害するために矢を放った。[37]矢は（獅子の）額に当ったが、彼の慈心により、彼の息子の愛情により、戻って地面に落ちく。このように矢は二度または三度と射られたが、[38]そのために獣王は怒り『この息子は息子ではない』と（言った）。[39]最後に放たれた矢は彼の身体を突き刺して通った。[40]

たてがみを持った獅子の頭を携えて彼は都に行ったが、[41]その時にはヴァンガ王の没して七日が過ぎていた。（没したヴァンガ）王には子がなかった。彼（シーハバーフ）の所行を人びとは喜び、その時何人も彼のヴァンガ国を自ら得る者はいなかったので、[42]集まった大臣達は、凡てシーハバーフ童子に『王になって頂きたい』と言った。[43]彼は王位を受けて、それを母の夫に譲り、自らはシーハシーヴァリを伴なって（彼の）生地に行った。[44]そこに都を造らせて、これをシーハプラ（Sīhapura）と言い百由旬の森林を（拓いて）村落をもまた築かせた。[45]ラーラ国[13]のシーハプラに人王シーハバーフは、王事を行い、シーハシーバリを第一妃とした。[46]彼の第一妃は後に二人ずつ双生児を十六回産んだが、長子をヴィシャヤ（Vijaya）と呼んだ。[47]第二子をスミッタ（Sumitta）と名づけ凡て三十二子があった。時が経って王はヴィジャヤを副王の位に就かせた。[48]

ヴィジャヤは行いが悪く。[49]また彼の供の者達も種々の耐え難き悪事をなした。大衆は怒って、王にそのことを告げた。[50]王は息子を諭したが、（不行跡）は止まなかった。二度、三度（の戒めも効果なく）以前と同じだった。大衆は怒って『汝の息子を殺させよ』と（要求した）。[51]時に王は、彼のヴィジャヤとその従者七百人の人びとを頭の半分を剃らせて、[52]船に投げ入れさせて、海上に放たしめた。彼等の妻達も同じように、[53]また（彼等の）子供達も同じように（させた）。これ等の男女童子達は別々に迫放され、離れ離れに島に着いて住んだ。[54]童子達の着いた島はナッガディーパ（Naggadīpa 裸島）として知られ、妻女達の着いた島はマヒラーディーパカ（Mahilādīpaka）として（知られた）。[55]しかるにヴィジャヤは先ずスッパーラカ[15]（Suppāraka）港に着いたが、ここでの供の者達の暴行を恐れて、再び船に乗った。[56]彼のヴィジャヤと名づける堅固なる智慧の童子は、双び列れたサーラ樹の間において如来が涅槃のために臥しておられた日に、ランカー（島）

のタンバパンニ（Tambapaṇṇi）国に上陸した。

善人の信仰と感激と（を起す）ために作られた大史中の「ヴィジャヤの来訪」と名づけられる第六章。

第七章

一[1]切世間を利益し給うた世間の導師は、最上安穏の刹那に到達して、般涅槃の床に臥し給うた。[2]数多くの諸天の大集会の際に説者中の最勝の慧者は、その近くに待せるサッカ（Sakka）に告げて言った。[3]『シーハバーフ王の子なるヴィジャヤがラーラ国から七百人の従者を伴って（来て）、ランカー島に着いたが大王よ、（彼は）私の教えを、ランカー（島）に樹立するだろう。[4]されば彼と従者とランカー（島）を善く守護すべきである』と。[5]諸天の王は如来の言葉を聞いて謹しんで、[6]青蓮華色の天に、ランカー（島）の守護を委ねた。彼は帝釈より托されるや直ちにランカー島に赴き、遊行者の姿をして（一）樹の下に入った。[7]ヴィジャヤを初めとする（家臣達）皆のものが彼に近づいて、『友よ、これは何の島ですか』と尋ねた。彼は『ランカー（島）であります。[8]ここには人びとはいないし、またここには霧もありません』と言った。『われわれに危難がありますか』と、『あなた達には危難が起ることはありません』と。[9]このように語って、水瓶から彼等に水を注ぎかけ、彼等の手に（呪いのための）糸を結びつけて、虚空より去った。[10]夜叉女（の侍女）シ[17]ーサパーティカー（Sīsapātikā）は牝犬の姿をして現われた。夜叉女の侍女が牝犬の姿をして現われた。彼等の中の（一人の）侍臣は王子に制止されたが[11]『村があるから犬がいるのだ』と（牝犬に）追いていった。彼（の侍女）の主人であるクヴェーニー（Kuveṇī）と称する夜叉女は、そこなる[12]樹下に糸を紡ぎながら、女苦行者のように坐っていた。[13]彼（の侍臣）は蓮池と坐っている彼の女苦行者をみて、そこで沐浴し、（水）を飲み、蓮の茎を取り、蓮の葉に水を（汲んで）上って来た。彼（の夜叉）女は、彼に言った。[14]『止まりなさい。おまえは私の餌だ』と。彼の男は恰も（縄で）縛られたように動けなかった。（しかし）彼女は魔除け（Paritta）の糸の威力により、彼を食べることができなかった。[15]その糸を（夜叉女に）乞われたが、彼は夜叉女に与えなかった。そこで夜叉女は叫んでいる彼を捉えて、夜叉の住処に投じた。[16]このようにして、彼（の夜叉）女は七百人をもまた投じた。凡ての者達が還って来なかったので、ヴィジャヤ（王）は恐怖と不安を懐き、[17]五つの武具を身につけて、彼の麗しき蓮池に行き、（池に）入っていった足跡を見また彼の女苦行者を見て、[18]『まこと、わが家臣達はこの者に捉えられたのか』と考えて、『尊姉よ、あなたは私の家臣達を見ませんでしたか』と彼女に尋ねた。[19]『王子よ、あなたは家臣達に何の（用があるのですか）。（水を）

お飲みなさい。沐浴しなさい』と彼女は言った。『さても夜叉女はわたしの生まれを知っている』と（王子は）確信し、速やかに[20]己れの名を告げて、（矢を）弓に番えて近づいた。彼は鉄鉤索で夜叉女の首を捉らえて、左手に頭髪を掴み[21]右手に剣をふりかざして『おまえは私の家臣達を返せ。もし返さなかったならおまえを殺害しよう』と言った。彼女は『主よ、お返しします[22]』と言った。その時夜叉女は恐れて命乞いをして言うには、『主よ、私に命を与えて下さい[23]。私はあなた様に王位を差し上げましょう。女の務めもまた他の務めでも求められれば果しましょう』と。彼は言葉に偽りがないために、彼の夜叉女に誓言させて『直ぐに侍臣達を連れて来なさい[24]』と言ったので、彼女は連れて来た。『これらは侍臣達だ[25]』と言うと、彼女は自ら取っておいた商人達の船に積んだ米やその他種々なる沢山のものを選り別けた。彼等侍臣達は米飯と副食物とを調えて王子に供し、彼等皆んなも、また食べた[26]。彼の夜叉女は王の居所を見、食して喜び、十六歳の麗しき乙女の姿に変ってあらゆる装飾を身に纏って王子に近づき[27]、樹下に高価な臥床を化作したが、それは周りに帷帳をめぐらし[28]、天蓋に飾られていた。それを見て王子は未来の利益を思い[29]、彼女と情を交わし、清浄なる臥床に横たわり、侍者達は彼の護りをして横臥した[30]。

その夜に彼は周りに音楽と歌声とを聞いて同衾している夜叉女に『（あれは）何の音か』と問うた。『王位を夫に与えるならば、（彼は）凡ての夜叉達を殺害するだろう[31]。夜叉達はまた（この島を）人間達の棲家としたと言うことで、私を殺すにちがいない[32]』と（考えて）、彼の夜叉女クヴェーニーはまた王子に向って言うには、『あなた、ここはシリーサヴァットゥ（Sirīsavatthu）と名づける夜叉の都なのです。ランカーの都に住むカーラセーナ（Kāḷasena）（と名づける）兄（夜叉）の、ポーラミッター（Polamittā）と名づける女児もまたここに連れてこられ、婚礼の祝の為に、ここで七日間盛大な祭が（執行され）、（そして）この集りは大きいので、そこでこの音が起るのです[33]。今日こそ夜叉達を伐って下さい。（さもないと）今後は（討つことは）不可能です[34]』と。彼が言うには『見えないのに、彼等をどうやって討てるだろうか[35]』と。『そこで私が声を発しましょう。その声によって殺しなさい[36]。私の威力によって、武器は彼等の身体に落ちるでしょうと[37]。（彼は彼女の）言葉を聞いて、その通りに行って凡ての夜叉を殺した。（ヴィジャヤは）自らの勝利を得て、夜叉王の装身具を（身につけ）、自らを荘厳し[38]天の中の天のように輝いた[39]。（更に）他の飾りによって侍臣達をそれぞれ飾らせた。（彼は）数日の間そこに住まいし[40]、タンバパンニーに赴いた。タンバパンニーに着いて、凡ての夜叉を殺した。このように行うことによって[41]、ヴィジャヤは勝利した。そして

侍者達に取り囲まれて、夜叉女と共に住んだ。舟から[42]（この）大地に下りたがヴィジャヤを初めとして、その時疲労の為に地に掌をつけて座した。銅色の土塵に触れて銅色になったことにより、彼の地方も彼の島も共にタンバパンニー[43]（銅掌）と称される。シーハバーフ人王は獅子を捕えたと言うので、シーハラ[44]（sīhala）（と呼ばれ）彼とのつながりあるもの、またこれら凡てはシーハラである。[45]

このようにヴィジャヤ王は、また最高の王であり、彼は人びとと共に出でて最上なる場所を見て、家臣達の（為に）[46]多数の村々を建てて、彼等侍臣達はそこここに村を造った。ア[47]ヌラーダ（Anurādha）村は、その名の人がカダンバ[19]（Kadamba）河の近くに（これを建て）、輔臣のウパティッサ（Upatissa）は、アヌラーダ村の北であるガンビーラ[48]（Gambhīra）河[20]の岸にウパティッサ村を建て、他の三人の大臣達も同じように、それぞれウッジェーニー[49]（Ujjenī）とウルヴェーラー（Uruveḷā）とヴィジタ（Vijita）の都[21]を建設した。凡ての大臣達はそれぞれ、人びとを止住させて、彼[50]の王子に言った。『主よ、王位にお就き下さい』と。このように言われて王子は、カッティヤ（khattiya）の処女が王妃とならない限り、王位に就くことを望まなかった。

時[51]に王の即位を望んだ彼等大臣達は、その方法は極めて難しいことではあったが、そ（の即位）についての危惧を排除し、マニ[52]真珠など多くの極めて高価なる贈物を使者に携えさせてマドゥラー[22]（Madhurā）の都に遣わした。主君[23]に忠実な大臣達は（主君のために）パンドゥ（Paṇḍu）王の王女を（得ようとし）また大臣達や人びとのためには他（の人びと）の娘を（得よう）として、彼[54]等使者達は船で速やかにマドゥラーの都に行き、贈物と書状とを彼の王に呈した。それより[55]（パンドゥ）王は大臣達と協議し（自分の）王女を（ヴィジャヤに遣わし）使者達には他（の人びと）の娘をも遣わそうと望んで、時[56]に麗しき都に太鼓を打ち廻らせて布告させて、『ここにランカー島に娘達の行くことを願える人びとは、娘[57]達に二枚の（衣服を）着せて（己れの）家の戸口に立させよ。この目印によって彼女達を受取るであろう』と。

このようにして、多くの乙女達を得て、その家族にも満足[58]を与え、あらゆる装身具と身に纏うものとを調えて、（己れの）王女を（ヴィジャヤに）遣わした。凡[59]てそれらの乙女達には適わしい敬意と、王者に適わしい最上の象馬車と象師等[60]と多くの雑役夫達をも、書面を附して伏敵者ヴィジャヤに贈った。凡[61]てその大勢の人びとは船から下りて、大渡海場へ上った。これによって、この港をマハーティッタ（Mahātittha 大渡海場）と呼んだ。

ヴィジャヤには彼の夜叉女により二人の息子達がいた。[62]息子[24]はジーヴァハッタ（Jīvahattha）という名であり、娘は

ディサッラー（Dhisallā）と言う名であった。ヴィジャヤ王は[63]王女の来るのを聞いて思うには、『さてどうすべきか』と。その時このことを夜叉女に言った。『愛しきものよ、おまえは今二人の息子達を置いて行きなさい。人間達は常に非人を怖れるからである』と。[64]これを聞いて、夜叉（族から来る）[65]危難のために、王に（彼の夜叉女は）こう言った。『王よ、私は今日出て行きます。（しかし）どのように生活したらよいのでしょう』と。彼女の言葉を聞いて（王は）怖れている[66]夜叉女に（このように）言った。『心配することはない。おまえには千（金）をもって供食を与えよう」と。（夜叉女は）[67]再三彼（の王）に乞うて、二人の子女を連れて、かつて行ったことがないので怖れた彼（の夜叉女）は、ランカーの都に到った。子女達を外に座らせて、彼女は一人で都城に入って[68]行ったが、それが夜叉女だと知った者達は『賊女』だと思って、『諸氏よ、この（夜叉女）クヴェーニーはシリサヴァッ[69]トカを汚して今ここに来た。われわれは彼女を討とう』と。（全）都の夜叉達は動揺し『ここにクヴェーニーがやって来[70]た』と。それから一人の粗暴な夜叉は、夜叉女の立っているのを見て、その時掌の唯一撃をもって（彼女を）殺した。彼[71]女の叔父の夜叉が都城から外に出て、子達を見て『おまえ達は誰の児か』と問うた。『クヴェーニー（の児）』と聞いて、[72]『おまえ達の母はここで殺された。おまえ達を見れば殺すだろう。速やかに逃げなさい』と言った。それから彼等は速や[73]かに逃れて、スマナ（Sumana）山に来たが、（兄妹のうち）彼の兄は（長じて妹の）その夜叉女と同棲した。子女達が次[74]第に殖え、彼等は国王の許しを得て、そのマラヤ（Malaya）地方に住いした。これは実にプリンダ（Pulinda）族の元祖である。

彼[75]（のパンドゥ王の使者達）は、船から上がって麗しき都に入り、ヴィジャヤ王（子）に、王女その他のものを献じた。その時王（子）は（パンドゥ王の）王女を見て満足し喜[76]びつつ、使者達に対して王の尊信をもって恭敬尊重の意を表わし、乙女達を適当に大臣達や人びとに与えた。凡ての大臣[77]達は集まって慣例にのっとりヴィジャヤを王位に就け、そして大祝祭を行った。それから彼のヴィジャヤ王はパンドゥ王[78]の王女を大いなる盛儀をもって第一王妃の位に据えた。大臣[79]達には財を与え、義父には毎年二十万金の価値ある硨渠や真珠を購った。彼のヴィジャヤ人王は以前の非行跡を捨てて正[80]しく全ランカ島を治めかのタンバパンニの都において三十八年間王事を行った。

善人の信仰と感激と（を起す）ために作られた大史中の『ヴィジャヤの灌頂』と名づけられる第七章

第八章

[1]彼のヴィジャ王は晩年に至って、このように考えた。『余は齢老いたが余には子がない。[2]（そのために）苦難により確立した王国も余の死後は滅亡するであろう。（この）王国のために余の最年少（の弟）スミッタ（Sumitta）を呼ばせよう』と。[3]時に大臣達と諮り、書面をそこに送った。書信を送って後、久しからずしてヴィジャヤは天界に行った。[4]彼が死んだ時彼の大臣達は、カッティヤ（刹帝利）の来ることを期待しながらウパティッサ村にあって王国をよく統治した。[5]ヴィジャヤ王の死後カッティヤの来訪に先立ち、一年間は、このランカーディーパには国王がいなかった。[6]彼のシーハプラにおいては、彼のシーハバーフ王の没後、その子である彼のスミッタが王になった。[7]彼にはマッダ（Madda）王の（王）女によって三人の息子があった。彼の大臣達はシーハプラに行って信書を王に呈した。[8]信書（の内容）を聞いて彼の王は、三人の息子達を呼び、『息子達よ、余は老齢である。汝等の中（誰か）一人が行け。[9]種々の価値があり愛すべきわが兄の所領であるランカーに赴き、彼の死により（空位となっている）そこに善政を布くべきである』。[10]最年少の王子であるパンドゥヴァースデーヴァ（Paṇḍuvāsudeva）は『（私が）参りましょう』と思って、この旅行における安穏を知って、[11]父（王）の許諾により大臣の子達三十二人を伴って、遊行者の装いをして船に乗った。[12]彼等はマハーカンダラ河の河口で船を下りた。彼等遊行者達を見て、人びとは十分なる恭敬をなした。[13]

ここで（彼等は）都城を尋ね、次第に行きつつ、彼等は諸天に守護されてウパティッサ村に着いた。[14]大臣達の同意を得た一大臣は、占師に刹帝利の来島のことを問うた。彼はそれに答えて、更に他の事をも予言して、[15]『刹帝利は第七日目に来島するであろう。彼の血統の人は仏教をこの地に樹立するであろう』と。[16]（その予言通り）第七日目に、彼等遊行者達が、ここに着いたのを見て問い、彼の諸大臣は（それが王子であることを）知って、[17]彼のパンドゥヴァースデーヴァにランカーの統治を託した。（しかし）王妃がなかったので、彼は未だ灌頂を行わなかった。[18]

アミトーダナ（Amitodana）釈迦族にパンドゥ（Paṇḍu）釈迦（と言う）子があった。[19]彼は卜占師に問うて、『（わが種族に）危難があるだろうか。これから他の危難はわれわれにあるだろうか』と（言った）。『凡[27]ての釈迦族の王達をヴィドゥーダバ（王）が殺戮するだろう』と。[20]（占師の言を）聞いて釈迦族の滅亡を知って、彼は自己の民族を伴って大船に乗って、ガンガーの向う岸に行った。そこに都城を築き、王国を建てて七人の児を得た。[21]バッダカッチャーナ（Bhaddakaccāna）と名づける末の女児がいたが、あらゆる善き相好を具え、[22]容姿端麗にして多くの人びとに望まれていた。このために七

人の王達が高価な贈物を彼の王に贈ったが、彼は（これらの）王達を怖れ、[23]（彼の王女の）安穏なる旅と（彼女が）王妃となるだろうと言うことを知って、三十二人の婦女と共に彼女を船に乗せて、カンガー河に放ち[24]『（取ることが）できるものは、わが娘を取るがよい』と（言った）。彼（の王達は）捉えることができなかった。彼の船は速やかに進んだ。ゴーナガーマ Goṇagāma）港に行って第二日目にそこに着い[25]て、凡て彼女達は出家人の姿をしてそこに上陸した。[26]ここで都を尋ねて、次第に行きつつ神々に守護されてウパティッサ村に到った。その時彼の大臣達はジーヴァ（Jīva）童子を遣[27]わして、『行って卜占師に今乙女達が来たのかどうか尋ねなさい』と（言った）。それで彼のジーヴァカは卜占師の下に[28]行って尋ねた。バラモンは（王女達の）来ることを予言したのを聞いて言うには、『父よ、今日こそわれわれの王女達がここに到った』と。卜占師の言を聞いて、そこに彼女達の来[29]れることを見て、一大臣は問うて（それが王女達であることを）知って王に合わせた。これら清浄なる智慧を有する大臣[30]達は、心の願いを凡て満したこのパンドゥヴァースデーヴァを正式に王として灌頂せしめた。尊き容姿のスバッダカッチ[31]ャーナーを己れの第一妃として灌頂せしめ、彼女と共に来たれる（処女達）を、己れと共に来たれる者達に与えて大地の守護者は安穏に住した、と。

善人の信仰と感激と（を起す）ために作られた大史中の『パンドゥヴァースデーヴァの灌頂』と名づけられる第八章

第九章

第[1]一妃（バッダカッチャーナー）は十[28]人の男児と一人の女児とを産み、最年長をアバヤ（Abhaya）と名づけ、末娘をチッター（Citta）と（名づけた）。[2]この女児を見て（ヴェーダの）神呪に通じたバラモンは言った。『彼女の息子は王位のために伯父達を殺すであろう』と。[3]『末の妹を殺すべきである』と九人の兄弟達は相談した。最年長のアバヤは『妹を殺すべきでない』と制した。彼等凡ての一致した希望として、[4]一本の柱（の上の）小屋に住まわせた。そして王の寝室にその入口が向うように造った。家の内側には一人の少女の奴隷女を住まわせ、[5]外には百人の男子を配置して彼女を護らせた。[6]人びとは彼女を一度見たのみで、その容色に狂わされたので、そのために彼女はまた「人狂わせのチッター」（Unmādacittā）と言う他の名を得た。[7]その時パンドゥ釈迦王の彼のスシーマー（Susīmā）妃は、バッダカッチャーナー王女のランカー島に赴き、[8]ランカー島においてパンドゥ王の后として灌頂したことを聞いて大いに喜び満足し、彼の妃は起りつつあることを知るために、[9]一人の兄弟ガーマニー（Gāmaṇī）を都に住まいさせて、カッチャーナ妃の下に（他の）六人の

兄弟を遣わし、彼等は船に乗ってランカー島に到った。彼等[10]はランカー島の王パンドゥヴァースデーヴァに会い、彼の妹（なるバッダカッチャーナー）とも会って、彼女と共に（兄妹の再会に）泣いた。王[11]によって十分に歓待され、王の許しを得てランカー島を遍歴し、望みのままに居住を定めた。ラーマ[12]（Rāma）の住んだ所はラーマゴーナ（Rāmagoṇa）と呼ばれ、ウルヴェーラ（Uruvela）とアヌラーダ（Anurādha）の住所はそれぞれの名によって呼ばれた。そのようにヴィジタ、ディーガーヴ、ローハナ（Vijita-Dīghāvu-Rohaṇa）の住んだ所はヴィジタ村、ディーガーヴ（村）、ローハナ（村）と称された。彼のアヌラーダは貯水池を造り、それより南には[14]彼の家を構えさせて、そこに住居を定めた。それより彼のパンドゥヴァースデーヴァ（王）は、自分の長子アバヤを副王の位に就かせた。[15]

ディーガーヴ王子のカッチャヤーデーヴィー（Kaccayādevī）との間の息子は兄弟の名によってディーガガーマニー（Dīghagāmaṇī）と（名づけられた）。彼の端正なる容姿で評判のウンマーダチッター（のこと）を聞いて、ウパティッサ村に行って彼女を見た。パンドゥ王は副王（の位）と共に王近侍（の職）を彼に与えた。その時彼のウンマーダチッターは窓に近づいて立てるガーマニーを見て、染心を抱き、奴隷女に言った。『あの方は誰か』と、それから『叔父の子』と聞いて、そこで奴隷女をそそのかして、それから（彼と）彼女は情を交わし、それから彼のディーガガーマニーは金属を取って鉤梯子を作り、（それを）取り付けて近づいた。夜に窓に鉤梯子を取り付けて（それを）登り窓を破って入った。（彼は）彼女と共にとどまり（翌朝）夜明けに出て行った。このように常に住んでいたが、そこには孔隙がなかったので（外部には）分らなかった。

彼女は彼によって懐胎し、それから胎が熟した時、奴隷女は（王女の）母に告げた。（王女の）母は（王）女に問うて、（父）王に告げた。王は（王）子達を呼んで言った。『われわれは彼（のディーガガーマニー）を扶養しなければならない。彼女を彼に与えよう』と。『もし（生まれたのが）息子なら彼を殺そう』と彼女を彼に与えた。注意すべきことを知って彼の王は『宜しい』と言った。彼女は産期に到って、産室に入った。ディーガガーマニーの彼のチッタなど二人の奴僕が守護した。彼等二人の人間達は昼夜に護りをなした。王子達はそこに行って自ら疑惑を述べた。彼等は誓約をしないので、彼の王子達は彼等を殺した。死んで彼等二人の奴僕は直ちに夜叉になった。二人は近ずいて胎中の童子を護った。それから彼のディーガガーマニーは彼等の動揺しているのを知って、一人の忠実な女の奴隷を呼んで、次のように言った。『さあ、捜しまわって、もし婦人を見つけたなら、腹中

に胎が熟しているか観察して来なさい』と。彼の女奴隷は捜しまわって、一人の良家の娘の腹で胎が熟しているのを見て来て、主人に告げた。彼[32]のチッターは息子を産み、彼の婦人は女児を産んだ。チッターは彼女に一千金と自分の息子とを与え、その女児を連れてこさせ（自分の）傍に臥させた。[33]『女児を得た』と聞いて王子達は喜んだ。母と祖母は二人とも（生まれた）王子に祖父の名前（Paṇḍuvāsudeva）と最年長の伯父（Abhaya）のそれとを一緒にしたパンドゥカーバヤ（Paṇḍukābhaya）と名づけた。[35]ランカーの守護者パンドゥヴァースデーヴァは王事をなすこと三十年であったが、彼のパンドゥカーバヤが生まれた時に彼は没した。[36]その人間の王者の死に、人王の子達は悉く集まって、その施無畏者アバヤ王子の為に、大規模の灌頂式を挙行した。

善人の信仰と感激と（を起す）ために作られた大史中の『アバヤの灌頂』と名づけられる第九章。

註

（1）596より625偈までは Mhv. には無いが、「悪意がなければ果を引く業はない」（paṭiccakammaṁ natthīti hiliṭṭhâm cetanaṁ vinā）と言うことについて Jātaka(Fausböll:Jātaka Ⅲ.P.64.ff.Sp.I.P.60～）の引用によって説明している。内容的には殆どジャータカと同じであるが、韻文に再構成している。因みに両者の冒頭の部分を比較のために左に引用しておく。

Extended（or Cambodian）Mahāvaṁsa 訳註（七）（福田）

(Jātaka319)Atīte Bārāṇasiyaṁ Brahmadatte rajjaṁ kārente Bodhisatto brāhmaṇakule nibbattitvā vayapatto Takkasilāya sabbasippāni uggaṇhitvā nikkamma Himavantapadese isipabbajjaṁ pabbajitvā abhiññā ca samāpattiyo ca nibbattetvā jhānakīlam kīlanto ramaṇīye vanasaṇḍe vasitvā……

(E.Mhv.596～599)Atīte Brahmadattamhi kārente rājataṁ kira samiddhe nagare ramme pure Bārāṇasivhaye dijakulamhi ekasmiṁ bodhisatto nibbattiya vayapatto sabbasippaṁ uggaṇhitvā vissuto Takkasilāya nikkhamma pabbaji isipabbajaṁ. Himavantappadesamhi pañcābhiññāsu pāragū patvā aṭṭha samāpattiyo kīlanto jhānakīlitaṁ ramaṇīye vanasaṇḍe vasanto ekako bhave.

（2）611偈は変形の三行詩

（3）626偈～645偈までは Mhv.265～282 までの偈に相当するが、随所に内容を変えた表現が見られる。

（4）Samantap.l.p.60;Mahābodhivaṁsa P110.*l.l.*5～9 では、常住、一部常住、有辺無辺、不死憍乱、無因生、想、非想、非想非々想、断滅、現法涅槃などの諸論の名を掲げている。

（5）637偈以下（Mhv.276～）は第三結集に関する記述である。第三結集についての南伝資料には、Dip.VII 34～59;Mhv.V.276～;Sp.I.P.35ff. 善見律巻二（大正・二四・六八四）・Mhbv.P.98ff. 北伝では第三結集に関する資料は存在しないことは周知の通りである。

（6）第六章は Mhv. では四七偈で終っているが、E.Mhv. では挿入あるいは変形により五六偈にまで増えている

（7） 1偈から46偈まではヴィジャヤの父シーハバーフの出自と王国建設に至る説話であるが、Dpv.IX 1～6 には極めて簡単な記述で、彼の母スシマーは獅子と同棲し二人の兄妹シーハバーフとシーヴァリーとを生んだ。息子シーハバーフが十六歳になった時、父の洞窟から抜け出し、そこに都市シーハプラを造り、王国を建てた（Vaṅgarājassâyaṁ dhītā araññe vanagocaraṁ sīhasaṁvāsam anvāya bhātaro janayī duve.Sīhabāhu ca Sīvalī kumārā cārudassanā mātā ca Susimā nāma pitā ca Sīhasavhayo.atikkante soḷasavasse nikkhamitvā guhantarā māpesi nagaraṁ tattha Sīhapuraṁ varuttamaṁ.）とのみ述べている。Mhv. 及び E.Mhv. では更に伝説を附加して、シーハバーフの父殺しの説話を創り出した。

（8） Vaṅga は Bangal

（9） Kāliṅga(Kaliṅga) は Bengal 湾一帯の地方

（10） 12偈及び13偈の一行は Mhv. には無く E.Mhv の作者の創作

（11） 26偈二行目から31偈一行目迄は Mhv. には無く E.Mhv. の作者の創作による挿入

（12） 32偈は Mhv. には無い。作者による創作

（13） Lāḷa は Gujerat(Malalasekera:Dictionary of Pāli Proper names)

（14） 48偈以下は Vijaya が不行跡により、近侍妻子眷族以下悉くランカー島に追放されたという説話は Dpv.IX.6～;Mhv. VI.39～;Mhbv.P111.ff.

（15） Suppāraka はインド西海岸の Sopāra(Mhv.tr.P54 註)

（16） Uppalavaṇṇa（青蓮華色の天）は Viṣṇu のこと。セイロン島の南のテーヴァナガラにあるウッパラヴァンナの祠は A.D 七九〇年に建てられた（Dictionary of Pāli Proper names）

（17） Mhv.VII.9 には夜叉女の侍女の名は無い。Ṭīkā に Kuveṇiyā Sīsapātināmikā paricārikayakkhiṇī とあり E.Mhv. ではこれを受けて Sīsapātikāyakkiṇī としている

（18） Mhv.VII.33.jeṭṭhassa yakkhassa は Ṭīkā に jeṭṭhassa Mahākālasenanāmakassa yakkhassa とあるのを受けて E.Mhv. では Kālasenassa jeṭṭhassa としている。

（19） Kadamba(Dpv.XV9; XVII.12.Kadambaka) は Anurādhapura 東側を流れる河で現在の Malvata Oya (Malwaṭṭe-oya)

（20） Gambhīra は Anurādhapura の北方一由旬のところにあると言う。（Mhv.XXVIII.7）

（21） cf.Parker:Ancint ceylan VIII The Last Cities of Ceylon

（22） Madhurā は南インド Madras にある Madura で Mathurā,madhurā の Uttara-Madhurā とは異なる。

（23） 夜叉女が既に妻となっていても、クシャトリアの王女を第一妃としなければ王の権威が確立しないという当時の結婚観の一端を反映していると思われる。

（24） Mhv.VII.59 Vijayassa suto dhītā tassā yakkhiṇiyā ahu（ヴィジャヤには夜叉女との間に一男一女があった。）とあるのみで、その具名は記していない。Ṭīkā に Vijasyassa jātā, Jīvahattho nāma suto Dipellā(or Disalā)nāma dhitā cā ti ime dve, とあるが E.Mhv. では Dipellā(or Dīsalā) が

Dhisallā となっている。

(25) ñātvā sotthigatimhi は Ṭīkā に attano Laṅkādīpagamanamhi sotthibhavañ ca,ca-saddena dassitaṁ sayaṁ āgatassa abhisekarajjapaṭilābhañ ca nemittakavacanena eva jānitvā

(26) Mahākandara は Manaar の北に注ぐ河の一つであろうと言う (Mhv.tr.P.63 註)

(27) Mhv.VIII.18 には E,Mhv.VIII.19 の sabbe Sākyarājāno Viḍūḍabho hanissati の記述はない。コーサラ国の Viḍūḍabha は釈迦族を滅亡に到らしめる。Dhp.A.I.P.346. 増一阿含三四品二等に見える。

(28) Dpv.X.1～3. に十一人の名を記している即ち Abhaya,Tissa,Utti,Tissa,Aselapañcama,Vibhāta,Rāma,Siva,Matta,Mattakalena,Cittā

(29) 釈迦族 Amitodana の七人の孫の名は Dpv.X.6 に Rāma, Tissa, Anurādha,Mahāli,Dīghāvu,Rohinī, Gāmanī とあり Mhv. などと多少異なる。